

公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

第8回アスリート委員会議事録

1 日時

平成29年7月12日（金）14時00分～16時00分

2 場所

虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO

3 出席者

<アスリート委員(各委員は五十音順)>

高橋委員長、河合副委員長、池田委員、及川委員、齋藤委員、
菅原委員、関根委員、田口委員、萩原(美)委員、廣瀬委員

<臨時委員>

芦立臨時委員(内閣官房)、岡崎臨時委員(東京都)※代理

<組織委員会>

森会長、遠藤会長代行、武藤事務総長、
中村CFO、室伏スポーツ局長、村里国際局長、小野スポークスパーソン、
松山競技第一部長、佐々木アクション&レガシー担当部長

○高橋委員長

それでは、ただいまから第8回アスリート委員会を開会いたします。

連日、暑い日が続きますが、本日はお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。委員長の高橋です。よろしくお願いいたします。

まずは、先日、九州を襲った豪雨によって多くの方々が被害に遭われて、今なお大変な状況が続いております。

アスリートの方や、また関係者の皆様方の中にも九州出身の方や、また、かかわられていらっしゃる方、また、ゆかりのある方もおられると思います。一日でも早く安心した日

常を取り戻せることを心から願いたいと思っております。

では、本日の委員会のメディアへの公開についてお知らせいたしたいと思います。

今回の委員会も記者の方にはフルオープンとさせていただきます。また、ムービー、スチールの方には、これまでと同様に会議の冒頭のみオープンとさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、森会長から、一言、御挨拶のほどよろしくお願いいたします。

○森会長

御苦労さまです。私が申し上げようと思ったことは、全部、高橋さんがおっしゃいましたので、そこは省きます。

今日もこの委員会だけではなくて、オリンピック関連、スポーツ事業関係に、皆様方が大変活動に御熱心に御協力いただいておりますことを、まず御礼を申し上げる次第です。

今月の24日で、間もなくであります、ちょうど3年前になります。3年前でいろいろ行事も予定されておるようではありますが、私どもとしては、さらに心を引き締めていかなければならない大事なときだと思います。

一つには、国内競技団体、それから国際競技団体連盟の協力のもとに、御承知のとおり、大会運営の核になりますスポーツマネジャーを常勤化させました。1年早くいたしました。

つまり、いよいよ具体的に場所の問題、それから足りない附属施設は何なのか、アクセスはどうなのか、そういうことは現場のアスリートを代表する皆さんが一番よくわかっておられまして、その皆さんが、いわゆるNFの立場、IFとの協議等々が、我々事務屋がやるよりも、現場のアスリートが中心になってやられることの方が適切であろうという判断でありまして、そういう意味で、IOCはまだ来年でもいいとは言っておったんですが、私どもの組織委員会としては、今年からもう既に踏み切っております、しかも片手間でやるのではなくて、専従化してもらおう。そのかわり給料もちゃんと出すというふうにいたしまして、固定化いたして、ほぼ8割ぐらいか、室伏さん。

○室伏局長

はい。

○森会長

8割ぐらいは決まっております、それぞれのスポーツマネジャーはもう積極的に、また、非常にはつらつとこの仕事に取り組んでいただいておりますことを大変喜んでおりま

す。皆様方も、それぞれ御関係があるわけでありますので、ぜひ、よろしく御指導してあげていただければというふうに思います。

今年はいよいよ計画から実行の段階に入ります。各事項を一つ一つ決めていく年になると、判断、決断、責任の重要性を感じております。

本日の議題は次第に記載のとおりであります。東京大会の入賞メダルはどのようなデザインがいいのか、また、本番前にいかにして選手と観客の一体感を高め会場を盛り上げていくかといった大会運営そのものについて、皆様ならではの御意見を頂戴できればというふうに考えています。

現在、組織委員会は、携帯電話からメダルをつくるという「みんなのメダルプロジェクト」を実施しております。今日も委員の皆さんには携帯電話を持ってきていただいたと聞いておまして、もう入れていただいたんですか。

○高橋委員長

まだですね。

○森会長

これから。

○高橋委員長

はい。これからです。

○森会長

今使っているのは入れないようにしてください。

都市鉱山という言葉があるんですが、まさか東京大会のメダルに使われるとは思いませんでしたが、これこそ21世紀の日本の技術、テクノロジーを活用したすばらしい企画であります。案外、なかなか集まらないものなのです。

昨日も別の委員会がありましたが、100万個と言っていたっけ、昨日。100万個要ると。

○中村CFO

数百万です。

○森会長

数百万というのは、100も900も数百万だよ。

そういうような数が必要なので、なかなか思うほど集まってこないそうではありますが、これまた皆さんのアイデアでこれが展開できるように頑張らなきゃなんなど、こう思っております。

最後になりましたが、3年前でありますので、今年は、あとオリンピックまで夏祭りが3回しかないということでもあります。日本は夏祭りが物すごく好きな国でありますから、とりあえず今年の夏にはエンブレムをあしらった法被と団扇を使うことにいたしまして、今、全国を通じて、もう販売を始めました。

皆さんにお土産に持って行っていただき、大いに宣伝していただければと思います。

そして、その次に、今年は間に合うのか、浴衣をつくりまして、新五輪音頭というのを、新五輪音頭と言ったら叱られる、三波春夫さんが歌っておられた、「あの日、ローマで」というあれですね、あそこを「日本」に変えて、若者向きのそういう曲に、今、専門家に編曲していただいております、それを近々発表する予定でございます。

50年前の三波さんや皆が歌っていた、坂本九ちゃんも歌っていたけれども、あのオリンピック音頭は知ってる？

○高橋委員長

知らないですね。

○森会長

あなたが知らないというなら誰も知らない。田口さん、まだ生まれていないから。もちろん生まれていないんだけど、それぐらい名曲だった。今でも僕は歌えますよ。

けれども、その歌の名残とあれが非常に強くて、全く違ったものを使うというのは、何か場違いなような感じがするぐらいオリンピックに合った音頭だということで、それを専門家がそれぞれ手続をとって、作詞など、編詩というのかな、変えて、それで曲を少しアレンジして、間もなく出てきます。

これは試作品でもないかな、やってみましたけれども、テンポがとても速くて、80歳に間なくなる私にとっては追いつくのが難しいほどスピード感のある歌でありました。

事務総長は全然、昔の歌もなかなかついてこれなかったんですが、ぜひ、またこれを大いに皆さんと一緒に楽しみたいというふうに思います。

以上、長くなりましたが、御礼を申し上げて、会議をよろしくお願いいたします。

○高橋委員長

森会長、どうもありがとうございました。

アスリートの皆さんには、今、お話があった法被を今日は着ていただいているので、夏祭りのように、今日は活発な御意見をどんどん出していただけることを楽しみにしております。

そして、こちら森会長からの御説明がありましたが、ここで組織委員会が4月から開始いたしました「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」について、改めて紹介させていただきます。

この取り組みは、全国の皆様から使用済みの携帯電話等の小型家電を集めて金属を抽出し、2020年の東京大会の金、銀、銅メダルを制作する取り組みです。オリンピック・パラリンピック大会史上初の試みとなります。

4月以降、IOC、IPCメンバーの方を初め、さまざまな方に御協力いただいております、私も、本日このプロジェクトに参加をするために昔使っていたものを持ってまいりました。

今後、アスリート委員会としてもこのプロジェクトに協力してきたいと思っております。それでは、今日は皆さんにも持ってきていただいているということですので、回収ボックスがあります前方にお集まりをいただけるでしょうか。

(家電回収 写真撮影)

○高橋委員長

たくさん家電を、御協力どうもありがとうございました。

今後のPR活動のためにも、今の撮影の写真を使わせていただきたいと思います。

本当に入賞メダルというのはアスリートの胸に輝いていくものなので、アスリートが率先して協力していくことに意義があると思っております。

委員の皆さんからほかのアスリートの皆さんにもぜひ呼びかけていただいて、輪が広がっていくことを期待しますし、こういったやはり取り組みこそが、また社会貢献にもつながっていくと思いますので、ぜひ、皆さんの方からもPRのほどよろしく願いいたします。

そして、事務局によれば、今後、メダル制作に必要な金属を回収していくのと並行しまして、デザインやメダルの製造業者を選定していくということです。

次第にあるように、本日は東京大会での入賞メダルへの意見、要望など話し合いをしていきたいと思っておりますので、多くの意見を皆さんからもいただきたいと思っております。

メダルには一定の仕様がありますが、どのようなメダルが東京2020大会にふさわしいか、アスリートとしていろいろ御意見があるかと思っております。忌憚のない御意見を、どうぞよろしく願いいたします。

(プレス 退出)

○高橋委員長

ムービーの方、スチールの方ということを入れようと思ったんですけども、素早い退

室をしていただいたようですので、早速、議題に入らせていただきたいと思います。

それでは、皆さん、お手元の議事次第をぜひご覧ください。

本日は、議題を大きく3つに分けて、意見交換を行っていきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

まずは議題1ですが、アスリート委員会が関係する大会エンゲージメントの活動と題しまして、(1)アスリート委員会WG1の活動報告から(3)入賞メダルまで、一気に説明を行ってしまい、最後に意見交換をしていきたいというふうに思っております。

それでは、まず、アスリート委員会WG1の活動報告について、私の方から報告させていただきます。

資料2をご覧ください。

まず、「アスリート委員会が関係する大会エンゲージメント活動について」と題しまして、前回、2月の委員会以降のWG1の活動報告をさせていただきます。

WG1では、組織委員会がまず行う大会エンゲージメント活動への協力、そして、大会パートナー企業等の連携によるさまざまなアクションを企画、実施しております。

続きまして、次のページ以降で、その実際の活動を報告させていただきます。

まず2月になるんですが、組織委員会や東京都が青梅で開催いたしました東京2020オリンピック・パラリンピックフラッグツアーのセレモニーに私も出演させていただきました。

当日は青梅マラソンの開会式と重なってやらせていただいたこともありまして、地元の子どもたち、そして地元の皆様方を初め、全国から集まったマラソンに参加する人たちと、非常に多くの人たちの中で盛大に開催されました。子どもたちは思い思いに旗を振っていただいて、オリンピック・パラリンピックに対する思いを本当に一つにさせていただいた、そんな瞬間だったというふうに感じております。

また、同じく都内での東京2020オリンピック・パラリンピックフラッグツアーのセレモニーに、こちらは豊島区ですけれども、池田委員に出演させていただきました。

また、次の文京区でのイベントにも、同じく池田委員に御出演していただいておりますが、池田委員は、当日どんな様子だったのでしょうか。

○池田委員

豊島区と文京区、双方で出演させていただきました。

身近で、こういうふうなオリンピックのフラッグ、パラリンピックのフラッグを振って、区の皆さんに知っていただくという機会というのは今までなかったので、子どもたちも含

め、親御さんも含め、いよいよオリンピックが東京に来るんだという思いが非常に強くなったのではないかなというふうに思っています。

ですので、子どもたちも、親御さんたちも、また関係者の皆さんも、オリンピックをこの東京でやるということを改めて自覚していただいて、自分たちがよりかかわっていくんだという気持ちをつくっていったんじゃないかなというふうに感じました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

続きまして、江戸川区でのイベントになります。今度は、田口委員が御出演されました。

そして、田口委員には三鷹市のイベントにも参加していただいたんですけれども、そちらの方の様子はいかがだったでしょうか。

○田口委員

江戸川区の場合は、一つのフラッグツアーのみならず、いろんなイベントも一緒に合わせてしていただきまして、2020年を目指している若手アスリートたちで、今すごく世界で成績を出している選手たちを呼んで、今どういう状況かというのを江戸川区の皆様にはプレゼンのような形でされていて、江戸川区の方々もすごく関心が高くて、どうでしょう、300人ぐらいとか、もう席が満タンになっていて、それでもお断りしていたぐらいだそうです。

三鷹市は、市長みずから卓球を見せていただきまして、打ったりされていて、すごく盛り上がっていましたし、三鷹市は小さなお子様たちがいらっしゃっていて、フラッグを取り合いになって振っているところがすごくうれしかったですし、そういう意味では、池田委員もおっしゃったとおり、みんなが、もうすぐ東京にオリンピック・パラリンピックが来るんだと、自分たちも何かかかわれるんだみたいな、そういう楽しそうな雰囲気はすごく感じることができました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

ここからは、組織委員会と東京都がフラッグツアーに合わせて被災地の学校で行ったイベントとなります。

2月28日には岩手県の中学校で萩原委員が講演や子どもたちとボールを使ったレクリエーションを行ったそうですが、萩原委員、当日はどんな様子だったでしょうか。

○萩原委員

岩手県の遠野市に行かせていただきました。

東京オリンピックということで、彼らは遠野ですよ。東京ではないんですけれども、その中でどういうふうにかかわっていかうかですとか、2020年に、じゃあ、例えば東京に来て、ボランティアでもいいし、見に来るのもいいし、どういうふうにかかわっていけるかなというようなことも含めてお話をさせていただいて、非常に素直な中学生が多くて、大変歓迎していただきました。

地元の獅子舞とか、それから遠野物語の場所なんですよけれども、語り部かな、遠野物語を暗唱するんです。そういうのを地元でやっていらっしゃるんですよけれども、私たちは見せていただいて、非常に歓迎していただきました。

私はバスケットボールのコーチなので、ボールを使ったちょっとした遊びというか、レクリエーションですね、こういうものもさせていただいて、非常に楽しく盛り上がったイベントだったのではないかなというふうに思います。

○高橋委員長

ありがとうございます。

そして、同じく宮城県でも小学校のイベントに参加されたのが関根さんということで、子どもたちに正しい姿勢で走る、走り方のレクチャーなどを行ったそうですが、様子はどうだったでしょうか。

○関根委員

私は石巻市貞山小学校というところに行ってきました。

フラッグセレモニーの後に20分間、スポーツの持つ力ということで講演させていただき、給食をともにとった後に、4年生と5年生を対象に走り方のレクチャーをしてきました。

実技自体が25分と短かったので伝え切れるかなという不安があったんですけども、走りが変わる子は、がらっと変わる子がいて、私も本当によい体験になって、充実した時間を過ごすことができました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

そして、最後になりますが、熊本県の小学校でのイベントとなります。

齋藤委員が子どもたちとウエートリフティングの動作を取り入れた実技体験などを行ったそうですけれども、当日の様子はいかがだったでしょうか。

○齋藤委員

熊本に行ってみりました。

かなり生徒の多い学校だったので、全員が体験することはできなかったという点が、少し残念かなとは思いますが、一緒に動いた生徒さんとは楽しく汗を流すことができたなと思います

改めて、私自身も体を動かすところでスポーツの持つ力というものを体験させていただく時間になりました。どんどん広がっていけばいいなというふうに思っています。

○高橋委員長

こういった大会やエンゲージメント活動に、たくさんこのアスリート委員会の委員の人たちが参加して盛り上げていただけているということで、これからも引き続きよろしく願いいたします。

また、続いてのページになりますが、こちらはアスリート委員会が自身で実施したイベントとなってきます。

今年の2月に、2年連続となりましたが、東京マラソンでのエキスポ会場においてステージイベントを開催いたしました。今回は、昨年リオオリンピック・パラリンピックがあったということで、パラリンピック銅メダリストの芦田創選手をゲストとしてお迎えさせていただきました。

リオ大会の盛り上がりであったり、パラリンピアン活躍というのを、直接、マラソン参加の多くの人たちの前でお話ししていただいたことによって、本当に大いに盛り上がりました。アスリートを身近に感じてもらえる機会だったのかなというふうにも感じております。

競技の枠を超えて、より多くのファンに興味を持ってもらうことのできる機会だと思いますので、この東京マラソンでのエキスポのステージイベントは、また、来年以降も続けていかせてもらえたらいいなというふうに心から思いました。

そして、続いてですけれども、先月になるんですけれども、去年の12月に引き続きまして、大会パートナー企業とアスリート委員会で、さまざまなアクションの具現化に向けて意見交換を行いました。

既に、もうアスリート委員会とタッグを組んでいろんなイベントが開始されているんですけれども、そちらの会議等の状況や感想を、河合副委員長からお願いいたします。

○河合副委員長

ありがとうございます。

こちらのパートナーミーティングで、もともとパートナー関係のさまざまな企業が集まっている場所で、我々アスリート委員会の活動について発表する機会をまずいただきました。

そこで話をしまして、我々として、このスポーツ健康分野のアクション&レガシープランを実行に移す段階ですので、ぜひ、ともに活動していただける企業の皆さん、一緒にやりましょうというお声かけをしたところ、お声かけが幾つかあって、先日の場所でも、改めて、企業としてはこういったことがやりたいとか、やれるんじゃないかと考えているという話をしながら詰める機会がありました。

その中で、NECさんとの間で、個別で具体の話をしたという事で、7月5日になりますが、先週、NECさんの本社に行かせていただいて、そちらで高橋委員長と私と、あと、NECの方に所属しているアスリートの方もいらしてという形で話をしました。

実際に、まず社内の社員の皆さんにしっかりと熱い思いを持ってもらえるようにすることから改めて取り組もうということも含めて話がありまして、明後日になりますけれども、NECさんの創立記念日になるのでしょうか、会社ができたところを記念した日のイベントに、今回の話し合いを通じて、田口委員にまた行っていただいて、社員の皆さんにもまたこのオリンピック・パラリンピックのパートナーとして、あるいはこれからの3年後に向けての思いを高めてもらうようなイベントに参加するという形になっております。

その他、いろんな企業さんからもさまざまな御提案をいただいております、随時、WG1を通じて、皆さんとも情報共有しながら、これからも一つ一つ形にしながら着実に3年後に向けて進めていければというふうに思っています。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございました。

アスリート委員会が始まってから、みんなで3年後にスポーツで明るい未来をとというようなテーマを掲げて一緒に活動している中で、ようやく皆さんからたくさんのアクションの意見をいただいたことが、スポンサーの方々と話し合いをすることによって、少しずつ現実味が急速に増してきたところです。

これからは、皆さんが同じ思いで、3年後に世界を変えられるように、また、たくさんの意見交換をしながら向かってまいりたいと思いますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

そして、最後になりますが、パートナー企業とアスリート委員会で連携して実施した第1号というべきアクションを報告させていただきたいと思います。

パートナー11社は組織委員会と協力して、大会ムーブメント促進を目的として、初めて合同運動会を、「GOLD SPORT DAY 2017」と題しまして開催いたしました。

本当にアスリート委員会の委員もたくさん参加していただいたんですけども、非常に盛り上がった中で、こちらは室伏スポーツ局長にも足を運んでいただいたということで、こちらは、その様子を含めて、室伏スポーツ局長に一言いただきたいなと思います。

よろしく願いいたします。

○室伏局長

ありがとうございます。

私も参加させていただきましたけれども、組織委員会からは、全体としてはゴールドスポンサーの皆様と組織委員会も合わせまして2,000名の方々の参加がありまして、組織委員会も100名の枠をいただきました。

それで、その枠が先着順だったんですけども、三日でなくなってしまったというぐらい組織委員会内でも大変人気があったわけですけども、ゴールドパートナーの皆さん、そしてまた、その御家族も来られて、私も綱引きに参加させていただいたんですけども、高橋さんのチームに負けてしまいましたけれども、大変有意義な大会になったかと思えます。

今後もこのようなエンゲージメント活動をぜひ進めていければというふうに思っております。大変素晴らしい内容だったかと思えます。

以上です。ありがとうございました。

○高橋委員長

どうもありがとうございました。

本当に、今からかかわるゴールドスポンサーの皆さん自身が、非常にこのオリンピック・パラリンピックに向けての熱い思いを持っていただけた瞬間なのかなというふうにも思いますし、こちらにはまだ暫定ということで、できてはいないんですが、当日の様子が写真集のような形で出ております。

こちらを作成いたしまして、これから各参加企業の皆さんに配られるということですし、終わった後の感想として、いろんな企業からまた定期的にこういった運動会をさせてもらいたいという感想もいただいていますので、また、皆さんと一緒にそういったイベントを

これからも続けてまいりたいと思います。

それでは、長くなりましたけれども、御清聴のほどどうもありがとうございました。

続いては、アクション&レガシープラン2017概要及び東京2020参画プログラムについて、事務局の方から説明をよろしく願いいたします。

○中村CFO

ありがとうございます。

今のワーキンググループの高橋委員長ほかの皆様への補足説明をさせていただきます。

本当に、アスリート委員の皆様におかれましては、全国で行われる参画プログラムに参加いただきまして、ありがとうございます。

オリンピック・パラリンピックはスポーツの大会ですので、アスリートの皆様方がいろんなイベントに参画していただいて、組織委員会の、また見える活動ということでPRしていただき、本当にありがたく思っております。

引き続き、よろしく願いいたします。

私の方からは、その参画プログラムの全体について御説明したいと思っております。

時間の関係もありますので端折って御説明を申し上げますけれども、資料3でございますが、最初の方は割愛いたしまして、6ページでございます。

夏へ向けた機運醸成ということで、冒頭に、森会長からもございましたが、2020年まであと夏は3回しかございませんので、今年の夏は機運醸成に向けてスタートを改めて切りたいということでございまして、皆様に今、着ていただいている法被であるとか、団扇を御用意いたしましたし、7月24日が3年前でございます。

組織委員会も当日理事会がございまして。また、開催都市である東京都、千葉県、埼玉県、福島県など、開催府県でもイベントがございまして。そういったものと横の連携をとっていきたく思っています。それぞれのイベントで、この法被や団扇なども使っていただけるということでございまして。そういった連携を図っていきたく思っています。

また、全国で行われます夏祭りも、ぜひ大会と関連づけて盛り上げていきたく思っております。また、参画プログラムとして特別のマークも用意しているところでございまして。

また、今後も秋には1000日前イベントがございまして。また、来年はピョンチャンがございまして、そういったイベントとの縦の連携も図ってまいりたいと思っております。

アスリート委員の皆様方におかれましては、夏祭りでも、御参加いただくときには、今日着ていただいております法被などをぜひ着用いただきまして、踊りを踊っていただければ

ばと思っています。よろしく願いいたします。

あと、夏祭りのところは10ページでございます。

既に幾つか応援プログラムとして参画いただいております品川区の祭り、あとは練馬区、江東区などの盆踊り等に参画いただくということになっておりますので、この輪を、ぜひ、この夏に広げていきたいと思っております。

11ページ目ですが、こういった参画プログラムの全体像でございます。

昨年の10月にスタートいたしまして、今までのところ、教育プログラムの実施校も合わせまして、全体で約1万件の認証件数がございます。

アクションの参加人数は280万人ということでございまして、一つ一つのイベントは、大きなものもございませうけれども、小さなものもございませうが、想像を超えるペースで広がっていることは非常にありがたく思っております。

一方で、分布を見ますと東京都並びに会場関連自治体が多うございませうけれども、今後3年間かけて、それ以外の都道府県にぜひ広めていきたいというふうに思っております。

具体的な、今後の参画プログラムをどう活性化するかということでございませうけれども、このアスリート委員会でも非常にいろいろ活発な御意見をいただいております。

ここでは一つ、先ほど皆様に御参画いただきました「みんなのメダルプロジェクト」と、その次の13ページでございますけれども、マスコットのデザイン募集をここでは御紹介させていただきます。

マスコットも、今年の8月1日からデザインを募集いたしますが、秋にかけてマスコット委員会の方々に絞り込みを行っていただいた上で、最後、三つないし4作品ほどいただきまして、そこまではエンブレムと一緒にございませうけれども、マスコットは特にお子様の関心が高いということもありますので、最終審査、四つから最後の一つ、オリ・パラ一つずつ選ぶところは、全国の小学校のクラスごとで投票を行っていただこうというふうに思っております。

単にどれがかわいい、どれが格好いいということではありませうで、この投票を行う前に、先生方からオリンピックの理念、パラリンピックの理念、考え方などを簡単に子どもたちにもわかるように御説明いただきまして、また、その教材も今週中にも各学校に配布しようと思っておりますけれども、そういったものを用いて、まずオリンピック・パラリンピックとはこういうものだと言説明いただいた上で、またクラスで、だったら、そういうオリンピックだったら、このマスコットじゃないか、このパラリンピックだったら、

このマスコットじゃないかといった議論をやっていた上で最後に決めていただく。

議論の上で一つのものを決めるというのも、子どもたちにとって非常にいいきっかけになるのではないかというふうに思っております。

このマスコットデザインの関係では、田口委員に非常に委員会に参加していただいて、御意見も頂戴しております。ありがとうございます。

このメダルプロジェクトも、マスコットのデザインの募集も、単に参画プログラムというだけではなくて、大会に何らかの形でかかわりを持つところが非常に我々も広げたいと思っているところがございます。単に参画プログラムに参加するということではなくて、エコメダルの場合には、携帯電話が2020年のアスリートの胸に輝くと、マスコットの場合には、いろんな議論が大会のときにいろいろ活躍するマスコットにつながるということで、子どもたちや、いろんな携帯電話など家電を寄付していただいた方が、何らかの形で大会を見て楽しむだけではなくて、自分たちもかかわったんだということになりますので、そういった機会をぜひこれからもつくっていきたいと思っております。

そういった観点から、14ページでございますが、もっともっとそういった企画を増やすことができないかというふうに思っております。

幾つか、このアスリート委員会でもいただいた御意見をここに掲げさせていただいておりますけれども、今日はまた、アスリート委員の方々から、もっとこういったイベント、こういった企画があるんじゃないかといったことの御意見をいただければと思います。

例えばでございますけれども、運動会の活用でございます。

秋あるいは春に、全国の小学校、中学校で行われるわけでございますけれども、2020にかかわるということで、ひと工夫、一味工夫していただいて、例えばパラスポーツをやっていたとか、あるいは、2020大会で新種目、これは野球、ソフトとか、空手とか、スケートボードとかありますし、今度の3on3ともかございますが、そういった新種目を取り入れた運動会が考えられないかとか。

あるいは小学校が大分小規模化しておりますので、合同運動会とか、さらに特別支援学校との共同運動会なども企画していただければ、それは地域のオリ・パラ運動会というようなものにもなるのではないかと考えておまして、こういった企画は一つどうかと思っております。

また、長野の大会では「1国1校運動」というのがありまして、各学校で一つの国を応援しようというのがございましたけれども、その流れで、今、小学校、中学校もコンピュー

ターを使ったり、インターネットを使ったりしておりますので、そういったものも使いながら、「一人1アスリート運動」、一人ひとりが日本のアスリートだけではなくて、世界のアスリートのどこか一人を選んでいただいて、そのメッセージを学校単位でまとめたいただくものもありますし、ホームページを通じてそれを投稿していただくものもありますし、それで、例えば選手村でそのアスリートにそれを寄贈するとか、あるいはアスリートから、また、ありがとうというメッセージをいただいて、子どもたちに返すといったことが考えられないかと思っております。

あとは、自己ベストというのが大会ビジョンの一つの柱になっておりますけれども、あらゆる人の自己ベストを募集するとかいうことのほかに、大会当日もオリンピック・パラリンピックで金、銀、銅をとった方、入賞した方だけではなくて、自己ベストを更新した方は、例えば場内でアナウンスして観客の皆さんがそれをたたえるとか、あるいは、それをきちんと我々のホームページで記録として整理するとか、そういったことも考えられるのではないかと思っております。

また、種目別で競技種目を盛り上げるためのアイデア募集ということで、アスリート委員会でもいろいろ御意見をいただきましたけれども、メジャーな競技、まだあまり知られていない競技を含めて、その競技種目を会場で盛り上げるにはどうしたらいいのかとか、あるいは知ってもらうにはどうしたらいいのかといったアイデアを掲示板等で募集して、実際に幾つかは実行するとかといったものなどが考えられるのではないかと思っております。

また、昨日、メディア委員会が開催されまして、そこでTBSの藤丸委員、元アスリートの方でございますけれども、各県、各市は地元のアスリートを非常にヒーロー視・ヒロイン視しているということでございますので、例えば先ほどの携帯のプロジェクトなども、東京を中心に運動は盛り上がりを見せておりますけれども、まだ広がっていない地域もございますので、そういったところなどは、その地元地元のアスリートが参加いたしまして、冒頭でやっていただいたような携帯電話をボックスに入れていただくというような、あるいはNTTドコモのショップで携帯電話を出していただくというようなイベントをしたらどうかといった御意見をいただいたところでございます。

私からは、以上でございます。

○高橋委員長

御説明をどうもありがとうございました。

説明をお聞きして意見もあると思いますが、まず最初に説明の方を続けさせていただきたいと思います。

それでは、最後に東京2020大会入賞メダルについて、事務局からの説明のほどよろしくお願いたします。

○村里局長

国際局、村里です。

先ほどから、「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」という形で御説明させていただいておりますが、私の方からは、この入賞メダルについて、基本的な仕様、IOCのプロトコールガイドに載ってるものをちょっと簡単に御説明させていただきます。

それで、また皆さんから御意見、また思いをいただければというふうに思っておりますが、資料をおめくりいただいて、大きさはオリンピック・パラリンピック共通でございます。直径が70mmから120mm。7cmから12cmですね。それから、重さが500から800グラム。それから厚さが3mmから10mmという大きさの仕様になっております。

デザインについては、これはオリンピックとパラリンピックで異なります。

基本的に、オリンピックのメダルのデザインについては、表面はパナシナイコスタジアム、あのギリシャのスタジアムと、それから勝利の女神のニケ像が、この下の方を見ていただくとおわかりになると思いますが、ここにパナシナイコスタジアムとニケ像がこのように表面に入ってきておりまして、ここに「XXXII Olympiad Tokyo 2020」という形で基本的にはきます。

裏面は東京のエンブレムをデザインしていただくというような形で、このデザインについて、またいろんな御意見があれば、またその旨を伝達していきたいなというふうに思っておりますが、パラリンピックのデザインについては、特段、規定はございません。

大会のビジョンやルックと合うようにすればよいというようなことで、それ以外の規定はございません。

リオのときは音が鳴るようになっていましたし、それから、あとはロンドンのときは手で、私が言うのはあれですけども、それで区別できるようになっておるようでございます。

それから、製造にかかわる工程でございますが、もう今年の4月から原材料にリサイクル金属を活用するため、携帯電話を初め、小型家電の回収を開始いたしております。

製造については、今年の秋に製造業者を決定する予定でございますが、デザインについ

ては今年度中に選定する予定でございます。

これもアドバイザーグループがありまして、今後どのような形で、選定委員会なども含めてどのように決めていくかということを決めていくという状況でございます。

先ほどからこのプロジェクトについて、日本全国、もうとにかくオールジャパンで皆さんに参画していただくということであるんですが、ぜひともアスリートの皆さんからこのプロジェクトの協力の輪を広げていくアイデアを、ツイッターですとか、皆さんの、あなたのグループ、クラブからどうやって発信して輪を広げていくかとか、いろいろ、またいろんなアイデアをいただきながら、ぜひその要望を具体化させていただければなというふうに思っております。

私の方は以上です。

○高橋委員長

御説明どうもありがとうございました。

三つの報告と説明を駆け足でやらせていただいたんですけども、この三つ、どの議題でも構いませんので、御質問や、また御意見がある方はぜひ挙手のほどをお願いいたします。

特にアクション&レガシープランの参画プログラムのところではいろいろな企画等々、説明がありましたし。

すみません、田口さん、お願いいたします。

○田口委員

ありがとうございます。

メダルについてですけども、メダルに関してのデザインということで、リオのときはすごく印象的にやって、振ると音が鳴るというのだったんですけども、今までオリンピックには点字はついていなくて、パラリンピックのメダルには点字がついていたんです。でも、私は、もし可能であれば、オリンピックも点字とか、何かわかるものをつけてはどうかなと思いました。

というのが、それぞれ皆様メダルを取られた方は、国に帰られたら、学校を回ったり、小学生にさわってもらったり、イベントに出られたりしますので、そういうときに視覚障害者の方が、決して視覚障害者はパラリンピックのメダルだけをさわるのではないのです。

オリンピックの人たちのもさわりますので、そういうときに点字がオリンピックの方にもついているといいのかなと思いましたが、あと、点字というのは視覚障害の方、みんな

が読めるわけではないので、例えばメダルのエッジのところに1本の線が入っているのは金メダルとか、2本とか、カクカクと。日本でよくチャンプーとかで、横にさわればチャンプーは何か線がついていて、リンスにはついていないとかありますよね。そういうのを例えばつくって、メダルのデザインとしてみたらどうなのかなというふうに思いました。

あとは、今日も入れさせていただいたんですけれども、この集めるのなんですけれども、携帯電話ってどんどん買いかえていらっしゃいますよね。

今のスマホって、電話の機能だけじゃなくて、カメラとかの機能があるので、そのときは、買いかえたときにすぐに携帯電話屋さんに戻すことをしない方もいっぱいいらっしゃるんじゃないのかなと思うので、定期的にアナウンスをどんどんしていくべきかなと思いました。

そんな中で、一つは、せつかくですので、マスコット委員会で、先ほど御説明いただいたように、小学生たちに投票していただきます。その投票日は多分、小学校で決まっていると思うんですね。2学期から3学期にかけてというふうにはなっているんですけれども、そのときにその小学校で、投票日に、みんな、お父さん、お母さんから要らなくなった携帯電話をもらってきてとかといって一旦集めるとか。

あとは、これから今まで東京都をフラッグツアーは回ってきたんですけれども、これから日本国中を回るというふうにお聞きしておきまして、そういうフラッグツアーのときに見にいらっしゃる方に持ってきていただいて、アスリートが実際それを受け取って、みんなアスリートに渡しましょうみたいな形で受け取って、それをまた集めるって、どんどん定期的に何かとコラボレーションとか、かけ合いながらやっていったらどうかなと思います。

特にマスコットは組織委員会の一つ重要なところのポイントでもありますので、ぜひやれたらなというふうに思います。

以上です。

○高橋委員長

チャンプーとリンスが違うとは知らなかったですけれども。

○田口委員

河合さんは知っていますよね。

○河合副委員長

僕は知っていますよ。

○田口委員

どっちですか。シャンプーかリンスかという。

○河合副委員長

シャンプーはギザギザがついている。リンスはなしで、最近、ボディーシャンプーは一本線なんです。

○田口委員

あと、牛乳のパックは上にこう、へこみがついていまして。

○河合副委員長

そうですね。

○田口委員

ジュースとかとわかるように。

○河合副委員長

あと、あれですね。ビールはビールと点字が振ってあったりとか、缶ビールとか、お酒とか書いてあるんです。

○森会長

間違えちゃ大変なものな。

○河合副委員長

昔、子どものころ間違えて飲んでしまったので。

○高橋委員長

そういった情報も、私たちは知らないところもとても多いので、そういうところを、またみんなに発信しつつ、何かそういった工夫ができたらいいのかなというふうには、昔から硬貨も、そういった技術も含めて、違いがわかるように日本はなっているので、そういった記述をまた入れてもらえればと思います。

それでは、ほかには御意見はあるでしょうか。

池田委員、よろしく願いいたします。

○池田委員

池田です、よろしく願いします。

メダルのデザイン等々はいろいろあると思うんですけども、僕が感じるのは、そのメダルを入れるケースだとか、メダルを取った後に、どういうふうにあすリートがこのメダルを使っていくのかなというところがすごく関心が高くて。

というのは、オリンピックでメダルを取った方によくメダルを見せていただくんですけども、自分の持っているポーチの中に入れてたりするような方が結構多くて、大会が用意した大きな木箱を持ち歩くというのがなかなか難しいような現状があるのかなと思うので、そのメダルを取った後に、きれいに、何かクリアケースとかに入れて持ち運びができやすいようなもののケースを幾つか用意しておくとか、それが日本的なものだったらさらにいいと思うんですけども。

あと、自宅に持ち帰ったときに、盗難とか、なかなかリスク管理もあると思うんですけども、家にしっかり飾っていただけるようなメダルと額縁みたいなところまで含めてしっかり、そのメダルを取って、メダルのデザインだけではなくて、その後の活用方法みたいなところまでをケアしていただけると、非常に、恐らくメダリストからしても、部屋にしっかり飾れるようなものがちゃんとオリンピックから提供されているというところというのがなかなか今までなかったのかなというふうに思うので、そういったところがプラスアルファであると、非常にメダリストもその後の汎用性というか、使い方というところで、ずっとたんすの奥に入っているわけではなくて、しっかり物として、金メダル、銀メダル、銅メダル、メダルの価値をしっかり半永久的に提供できる、見ていただけるというところを提供できれば、何かおもしろいんじゃないかなというふうには思っています。

○高橋委員長

ちなみに、河合さんはたくさんメダルを持っておられますけれども、どちらで保管とかされているんですか。

○河合副委員長

ほとんど押し入れの中です。持ち運ぶときは、水にぬれないので水着入れの中にタオルでくるんで持ち歩くのが一番安全なので、多いですね。

○森会長

委員長はどうしているの。

○高橋委員長

私の場合は、シドニーのときは非常にかわいいケースをつくっていただいたので、それがすごくうれしいこともあり、そのケースを持って毎回持ち歩いていますね。

ふだんは、でも飾るところはないので、そのまま押し入れなんかには隠してあったりする状態ですので、飾ってあるものだったり、ケースがあると、くるくると巻いて入れてポーチの中ということになる部分では、非常にその後の取り扱いといいますか、その後

の所持している部分では助かるのかなという感じはいたしますね。

では、ほかにはいかがでしょうか。メダルについてや、参画プログラムについて。

ありがとうございます。では、及川委員、よろしくお願いいたします。

○及川委員

特段なんですけれども、僕も田口さんと同じことを思っていて、最初は、メダルについては、オリンピックとパラリンピックがということなので、パラリンピックのデザインをオリンピックのようにしていくことを考えたんですけれども、さっき聞いたら、オリンピックはオリンピックで歴史とか、そういう規定だったりとか、そういうのがあるとした場合、思ったのは、さっきも言ったように、オリンピックのデザインの中にちょっとした工夫というか、点字を入れるとか、そういったことをして、オリンピックもパラリンピックを見ているよと、オリンピックの価値を上げていくとか、今まではオリンピックにパラリンピックがというところだったけれども、オリンピックもパラリンピックのところと一緒にっていくという姿勢がこのメダルに入っていくという。いろんな条件とかがあろうと思うので、アイデアとしてはオリンピックの中に点字が入っているというのは、今までにないそういうアプローチの仕方かなというふうに思ったのが一つあります。

大会エンゲージメントの活動とかに関しては、僕は今、日本代表のヘッドコーチをしているんですけれども、国内で国際大会を開いたりとか、国内の大会でオリンピック・パラリンピックを意識した大会というのが開かれている中で、例えば、組織委員会とオリンピック・パラリンピックとのコラボレーションというものが、何か、もっともっとできるといいなと常に思っているところです。

なので、車椅子バスケットボールはかなり人気があると言われている競技なので、早速、8月の終わりには国際大会を東京体育館で開きます。国際大会を開くので、そういったところで、例えばアスリート委員のブースをつくって、皆さんが間近で見える席を確保しておいてみたいな、本当にできるところから人とかかわって行って盛り上がっていくことができたらいいなというふうには思いました。

○高橋委員長

オリンピック・パラリンピックを同時で行うのは64年からの2回目ということでは、同時に開催するからこそ、今回のオリンピックとパラリンピックをもっと近づけるといったメッセージを伝えることがメダルではできるのかなといった部分では、多分、田口さんや及川さんが言われたように、共通のものをつけるというのは一ついいのかなと、私自身も

今お聞きして感じました。

ほかにはどうでしょうか。

では、河合さん、よろしく申し上げます。

○河合副委員長

まず、メダルの件、皆さんいろいろ言っているから、ありがとうございます。正直、本当に私は金、銀、銅全部を取った大会もあるんですけども、もう全然わからなかったですね。どれが金メダルですかとかと言われると「見た方がわかるんじゃないですか」とかと言いたくなるわけですね。

よく冗談で、「これは、なめると味が違うんですよ」とかと言っていたときがあって、金メダルはカレー味で、銀が塩味で、銅メダルはしょうゆとかと言ったら、ふざけるなど怒られていたことがあります。でも、本当ににおいが、銅は錆びてくるのか、そのにおいがしたりとかはあったりとか、重さは違うんですよ、多少なんですけれども。

なので、そういう微妙な違いは出てくるんですけども、明らかにわかるような、そういうものはしてほしいというのは常々思っているから、それがリオは音でしたけれども、例えば先ほどからあるように、横の淵のところを一本線なのかとか、縦の線なのかとか、いろんな技術もあると思うから、そういう形で、表と裏の表面のデザインはそれぞれだと思いますし、そこに入れるという方法ももちろんあると思いますが、そういうやり方もアイデアとしては考えられるかなと。

一番、お金の問題じゃないんですけども、リボンのところも結構こだわるところだと思うから、リボンの結び目のところでそれがわかるようにしてある大会も昔あったから。これはパラリンピックではないんですけども。それが、多分、実は一番安上がりなんじゃないかなというのはあると思ったところから。

ですので、いろんなアイデアがこれからもあると思いますから、ぜひ、思い出に残る、本当に重みを感じられるものになっていくといいなと思っています。

あとは、「みんなのメダルプロジェクト」ですけども、いろんな方々、一人でも多くにまず参加いただくというのがとても大切なことなんですけども、改めてここでパートナーになっていただいている企業の皆さんに、社員の皆さんから1個ずつでも出すとすごい数になると思うんですよ。

60社近くもありますし、その企業も皆さんすごい人数がいますから、そういうところでも改めて御協力いただきながら、それも活動しているよというような見せ方をしてもら

のも、まず取り組んでもいいのかなと思っています。

本当に何万人と所属されている方々がいる企業ばかりだと思いますので、この力を大いに活用していくというのも、これから、そこに我々がアスリート委員として声をかけていくとか、そういう呼びかけをしに行くという活動はまた一生懸命やればなと思いました。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

それでは、齋藤委員、よろしく願いいたします。

○齋藤委員

私もメダルに関しては、田口委員がおっしゃったユニバーサルデザインというアイデアがすごくいいなと思いました。

シャンプーとかリンスのデザインは、ユニバーサルデザインというようですが、それがオリとかパラとかという区分けなしにということにもつながるんじゃないかなと思いました。

都市鉱山のところの携帯電話などを集めることは、私はもちろん知っていたんですが、今回、持ってくるということに当たって、会社でもし何かあればと声をかけたんですが、そうすると、そんなことやっているんだねというような反応も実はあったのが現状でした。

先ほど事務局にも少し相談させていただいたんですが、パートナーという関係があるので、どこまで可能かはわからないんですが、そういったポスターとかがあれば、どんどん周知というところにつながるのかなと思いますし、また、いろんな夏祭りとかも組織委員会さんと一緒にされるものがあるようなので、そういったところで呼びかけをしてみたりだとか、いろんな場所でどんどん周知するというところは一つ大事になってくるんじゃないかなというふうに思いました。

私も、実際、実家に帰ればいっぱいあると思った部分もあるので、また、次、夏休みに実家に帰ったときには探してみようかなと思っていますので、まず、定期的にといいか、そういうタイミングを目がけて周知というところがあってもいいんじゃないかなというふうに思いました。

あとは自己ベストサイトというところは、すごくアスリートにとってはうれしい取り組みかなというふうに思います。

私は実際、メダルには全く手の届かないようなところでオリンピックの競技をした者と

しては、ただ、自己ベストは更新できたという思い出もあるので、そういったところを評価してもらえるとというのは、ただただメダルだけじゃないというところの評価にもつながってくると思いますので、そういったところの評価というのはすごくアスリートにとってうれしいことじゃないかなと思いますので、ぜひやっていただけたらと思います。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

○森会長

質問。

○高橋委員長

はい。

○森会長

今までで、日本の選手は、メダルというのは何十個か、何百個か、どれぐらいあると思う。

○室伏局長

オリンピックは100。

○森会長

アバウトでいいんだよ、試験じゃないから。

○室伏局長

オリンピックだけで、金で100以上はあると思います。

○森会長

本当は500ぐらいある。銀、銅の方が多いんでしょう。金の方が多いの。

○高橋委員長

銀、銅の方が多いと思います。

○森会長

芦立さん、あなたは所管かどうかかわからんが、国立競技場の、これから何か飾るあれとかは、どうするかと議論しているようだけれども、そこに歴代に取られたメダルを全部展示するようなあれをつくれなかな。多くてだめかね。

○芦立臨時委員

歴代ですか。

○森会長

たんすの中に入れていたよりは。国立競技場へ行けば、みんなが見られるよというので。

○武藤事務総長

オリンピックとJOCからと両方あるんでしょう。

○芦立臨時委員

はい。JOCが、今度、日体協とJOCのビルの1階を博物館にすると。

○森会長

そこでもいいんやね。

○芦立臨時委員

はい。そこは実現可能性がかなりあると思います。

○森会長

それを関係者に言ってみてくれんかな。もう設計は始まっているだろうから、起工式の間もなくあるから。

だから、できれば、そういうところに、JOCにやれって言ったってやらないだろう、金が要るとか。我々もこのオリンピックが終われば組織委員会はなくなっちゃうわけだから。

だから、あるとすれば、国立競技場でやるか、今度できる日体協ビルの一角にそういうものを展示しておいて、皆さん、そこに、そのかわり時々取りにいてもいいし、懐かしい我が子に会うような思いで行ってもらってもいいし。取り出しも自由にできるようにするとかやれば、たんすや押し入れよりはいいと思うな。みんなに見せて。

これは、遠藤さん、あなたのテーマだから。

○高橋委員長

ありがとうございます。

そうですね。ぜひ、今の話を伝えていただいとということ、皆さん。

では、私からも。シドニーオリンピックのときは、メダルを取った選手がアスリート村というか、アスリートの拠点のところ、持っていくと自分の競技種目と記録とか、名前を彫るサービスがあったんです。

ただ、私がいろんな方に見せてもらった中で掘っている人はただ一人としていなかったというのがあったりしたのですが、行くと長蛇の列であったり、なかなかサービスがちゃんと全てができていないという部分があったりして、なかなか浸透していなかったとは思いますが、室伏さんは書いてありますか。自分で持っていくんです。

○室伏局長

種目は書いてあります。

○高橋委員長

そこを、何か名前を彫れるというような形のサービスが、選手村の中で取り組みとしてあったんですけれども、それがなかなか、金メダルといっても本当に非常にたくさんのメダルが出されて、銀メダル、銅メダルも同様なんですけれども、それを世界で一つだけのメダルに、その人のものにするというところで、そういったサービスを、もう少し徹底を日本ですることができれば、自国に戻ったときに、自分の名前をちゃんと彫れる、彫った人たちがもっと増えていけばいいのかなというようなサービスを、日本でもやっていけたらいいかなというのは感じております。

また、先ほどの携帯電話の都市鉱山のものなんですけれども、やはりこれから東京に向かってはいろいろな大会もNFを通じてされると思うんですけれども、そういった大会等の観客の人たちも含めて、会場内でボックスを置いて回収することを各競技団体に呼びかけてみることはいかがでしょうか。

そうすると、終わった後にアスリートの人たちがそのところで募金するような形でみんなが呼びかけて、選手を間近に見られるという皆さんの思いと、そして皆さんにもっと選手だけではなく、観客の人たちを含めて宣伝できるといいますか、広めていけるということなので、一つの競技からオリンピックというようなつながりを持って皆さんが考えられるということで、そういったものを広めていくことができればなという感じはしております。

ほかには、どなたか御意見があるでしょうか。

それでは、関根さん、お願いいたします。

○関根委員

私もメダルについてなんですが、今の高橋さんと田口さんの意見に重なりますが、全国の小中高に回収ボックスを設置するのはどうかなと思いました。

というのは、私は今、PTAの役員をしまして、しょっちゅう学校に行くんですけれども、そこに壁新聞というのがあって、保健ニュースだったり、社会ニュースだったり、いろんなそのときの話題のニュースが小学校は結構ずっと張られているんですね。

うちの学校は朝日新聞だと思うんですけれども、そういうのを各新聞社に、例えば臨時号みたいな感じで、今回のメダルの回収のニュースをつくってもらって、お金があれば組

織委員会できれいなカラーのポスターなりをつくっていただき、それを学校に張ってもらって、回収ボックスを設置するのはどうかなと思いました。

結構、小学校はコピー機の終わった後のインクですとか、牛乳パックですとか、いろんな回収をされていて、そういう回収ボックスを置くスペースがあるんですね。そこに一緒にまぜてもらったら、結構、回収率も高まるし、その小学生たちの機運も高まるし、教育にいいんじゃないかなと思います。

もう一つ、先ほども出たメダルを持ち運ぶケースですとか、その関連ですが、もし私がメダルを取っていたら、本物をずっとリビングに飾るといのは心が引けるといのか、そういう気持ちがあるので、もう一つ、メダルがいつもそばにいられるような、例えばですけれども、ピンバッチだったり、小さなレプリカだったり、置物だったり、そういうのがあって、そばにいつも感じられるとうれしいかなと思いました。

以上です。

○高橋委員長

どうもありがとうございます。

たくさんの意見を出していただきました。ぜひ参考にさせていただいて、また、いろんな人の意見を聞いて、随時、御意見があるアスリートの皆さんは、この終わった後にでも構いませんので、また、ぜひ意見を事務局にお伝え願いたいと思っております。

それでは、続いてまいります。

次に、アスリート委員会のワーキンググループ2の活動報告について意見交換を行いたいと思います。

こちらは池田委員に説明をお願いしたいと思います。

池田さん、どうぞよろしく申し上げます。

○池田委員

池田です。よろしくお願ひいたします。

先般からワーキング1と2で、高橋委員長と、私の方で2を取りまとめをやらせていただいております。

私のワーキング2では、大会のサービスレベルで、会場のインフラ、選手の移動だとか、フードだとか、いろいろとあるんですけれども、そういったものをアスリートの視点から積極的にサービスレベル向上に向けて反映していくということで、2の取りまとめをやらせていただいております。

まず、1ページ目のワーキンググループ2の活動報告について、1-(1)というところからスタートしていきます。

こちらでは、ワーキンググループ2では、アスリートの視点で、2020年大会のアスリートサービスに向けて、適正に設定されるようにプロセスをつくって活動を展開しているような形になります。

12月に、上記に書かれているオリンピック・パラリンピアンを集めて、約三日間にわたり、協力を仰いできました。

第1回目は居住スペースに関するレビューということで、三日間に分けてアスリートからいろんな意見をいただきました。リビングや寝室、バスルームに至るまで、東京2020年大会における選手村居住スペースに関して、いろんな屈託のない意見をいただいて、過去の知見を踏まえ、いろいろなコメントや意見をいただいております。

続いて、次のページの1-2ということになります。

こちらは選手村の計画に関するレビューです。

2月に行った選手村の住環境を含めて、そういったところから選手村のマスタープランとコンセプトに関するレビューを、12月にアスリートから集約したコメントや意見を組織委員会にフィードバックするような形です。こちらも積極的にアスリートから気づいたことを、大会組織委員会の皆さん、各FAの皆さんにフィードバックさせていただきました。

続きまして、ワーキンググループ2の活動報告1-3、次のページになります。

こちらも、選手村の計画に関するレビュー。こちらは会場計画におけるレビューと現場の視察になります。

実際の晴海の選手村に、アスリート、私、上山選手、河合さん、田口と一緒に、その現地で、実際に今の選手村がどういうふうになっているのかということ視察させていただきました。

実際に、こちらをタクシーを使って、どれぐらいの規模で、ここに実際に何ができるのか、ここは選手村のビレッジ、ここは湾岸エリアなので緑を活用した何かをできないかということ積極的に議論させていただきました。

プラス選手村でプールやトラックなどの必要性の有無や提言も、選手村のロケーションを生かした提案などを積極的に行った次第でございます。

続きまして、ワーキンググループ2の活動報告2、次のページになります。

こちらはPlan One Team、会議のサービスレベルのプランニングのことになります。

こちら、私と上山さん、河合委員、田口委員という形で参加させていただきました。

こちらは東京2020大会の運営計画に選定されているスタッフが集まる会議でございます。POT会議に参加した方を中心に議論をさせていただきました。

アスリート向けのサービス提供に関する各FAからの現状の計画について説明を受けて、アスリートの委員から、いろいろな助言を行った次第でございます。

次のページになります。

ワーキンググループ2の活動報告3というところです。こちらは国立スポーツ科学センターの視察になります。

4月には、選手村におけるトレーニングジムを参考にしていただくために、国立スポーツ科学センターでワーキンググループ2の活動のメンバーを中心に、組織委員会の方に対して、国立スポーツ科学センターのジムなどを含めたところを視察していただき、どういふふうな形でアスリートがオリンピックに向かって、競技に向かっていくのかというところを実際に見ていただくような機会をつくらせていただきました。

今後も、スタッフに啓発するために、こういった機会を積極的につくっていきたいと思っております。

実際、東京2020の選手村の中の、ジムの活用方法というのは、今、議論されていると思うんですけども、ふだんやりなれた形で、例えばベンチプレスだったり、ランニングマシンだったり、そういったところが、できるだけコンパクトで、選手からするとやりやすい形でできるのが非常にベストだと思いますので、そういったところを、私たちからすると、情報として提供できればいいんじゃないかなというふうに思っております。

次のページに行きます。

ワーキンググループ2の活動報告4というところです。こちらは、IPCアスリートフォーラムでのアンケート調査の実施とさせていただきました。

こちらは、河合委員が中心になって動いていただいたんですけども、6月にドイツで行われた第1回のIPCアスリートフォーラムの機会を活用して、東京2020大会のサービスレベルのプランニングに役立てるようにミニのアンケート調査を実施させていただきました。

パラリンピアンを中心とする38名の海外アスリートにアンケートの協力を得ることができました。現在は、アンケートの集計、分析を行っている段階で、終わり次第、組織委員会にフィードバックさせていただきたいと思っております。

次のページ、お願いいたします。

まとめなんですけれども、今後の活動として、こちらのワーキンググループ2の活動報告について5というところに記載させていただいています。

7月下旬から2月下旬まで、このような形で、引き続き、ワーキング2は動いていきたいと思っております。

また、IPCアスリートフォーラムのアンケート調査の結果の報告についても、近々でフィードバックしていきたいと思っております。

また、選手のレクリエーション施設について、ワーキング2の活動協力でいただいたアスリートの意見を初め、多くの皆さんに協力を引き続きお願いしたいと思っております。

最後になりますけれども、先ほど高橋委員長から報告があったワーキング1と重ねて、アスリート委員会の活動は、先月末に開催された第4回のIOC調整委員会の分科会で、IOCに、組織委員会から報告を既に行っている状況でございます。

その場においてIOCアスリート委員会のカースティコベントリー氏から、エンゲージにおいて、サービスレベルの設定においても、アスリートがこのように動いているというのは高く評価させていただいているという現状を聞いております。

引き続き、アスリートが大会に関与していくということも積極的に行っていきたいと思しますので、引き続き、皆さんも御協力の上、アスリートも、積極的にアスリート委員会を通して大会のサービスレベル向上に寄与していければいいんじゃないかなというふうに思っております。

以上で、ワーキンググループ2の活動報告とさせていただきます。ありがとうございます。

○高橋委員長

御説明をどうもありがとうございました。

それでは、アスリート委員会、このワーキンググループ2の活動についての意見交換をしてみたいと思いますが、御質問や御意見がある方は挙手をぜひよろしくお願いいたします。

3年後の東京オリンピック・パラリンピックでは、世界中からトップアスリートが集まるわけですので、そこで最高の環境を提供する、自己ベストをそこで更新できるような環境を提供するということでは、今まで皆さんが経験された、その経験というのが一つ大きな、これからの場所づくりであったり、環境づくりに大きく影響を与えてくれるのかなというふうにも思いますので、ぜひ、皆さんからのこういった活動でいろいろな意見をこれ

からも聴取していきたい、また、ワーキンググループ2で皆さんに声をかけられることもあるとは思いますが、御協力を願いたいというふうには思っております。

大丈夫でしょうか。

報告が多かったですので、こういった活動をこれからしていくということで、皆さんも一緒に気持ちで向かっていくような思いでいただけるとありがたいなというふうに思っております。

それでは、最後に、議題3のスポーツ・プレゼンテーションについて、事務局から説明をお願いしたいと思います。

○室伏局長

スポーツ・プレゼンテーションについて説明させていただきます。

アスリートの皆さんは、過去、オリンピック・パラリンピック初め、さまざまな国際、国内大会に参加されてこられたと思います。

そこで、スポーツ・プレゼンテーションというのは、会場の進行であったり、競技の演出だったり、そういったことなんですけれども、ぜひ、アスリートの観点から今回御意見をいただきまして、参考にさせていただきたいというふうに思っております。

それでは、担当の松山部長をお願いいたします。

○松山部長

それでは、私からスポーツ・プレゼンテーションについて説明をさせていただきます。

スポーツ・プレゼンテーションとは、主に競技エリア等の会場で実施する競技進行及び会場演出のことをいいます。スポーツ・プレゼンテーションの実施例としましては、選手入場の際に選手にスポットライトを当てるなど、競技開始に向けて、選手や観客の興奮を高めていく演出や、大型ビデオボードで競技映像やリプレイを映すことによりまして、観客がより競技を見やすくしたりするような例が挙げられます。

ページをめくってください。

その他、試合前やハーフタイムなどにマスコットやダンサーなどにより場内を盛り上げたりする場合があります。また、最近では、プロジェクションマッピングによる演出も使用されることが多く、例えば競技エリアフロアに国旗やエンブレム、選手、チーム紹介を映し出したりする演出などが行われたりしております。

ページをめくっていただきまして、スポーツ・プレゼンテーションの目的及び役割です。

スポーツ・プレゼンテーションの目的、役割は主に4点となっております。

一つ目が、選手のベストパフォーマンスを引き出すため、選手が競技に集中できる雰囲気・環境をつくり上げるアスリートファースト実現のための役割でございます。

二つ目が観客の競技理解の促進です。

オリンピック・パラリンピックでは、その競技のことをあまり知らない観客が来場する場合があります。観客に向けて、競技ルールや選手の情報を知ってもらうという教育、また、見えないもの、聞こえないものを映像や演出を使用して観客に伝えていく可視化、可聴化、目の前で何が起きているかをわかりやすく伝える理解のアシストの役割を果たします。

三つ目が観客の盛り上げです。

観客がより競技を楽しみ、唯一無二の経験ができるようなエンターテインメント性、また、観客もみずから大会の雰囲気づくりに参加できるように、観客を促すエンゲージメントも目的です。

最後に、大会全体の統一感です。

個々の競技によりまして、スポーツ・プレゼンテーションの実施内容は異なりますが、統一されたコンテンツなどを用いることによりまして、大会全体に統一感をもたらしたり、また、日本特有の音楽・映像や最先端技術などを用いることによりまして、文化発信を行うこともできます。

ページをめくっていただきまして、スポーツ・プレゼンテーションの目指すゴールとしましては、選手と観客が一体となって作り出す会場内の最高の雰囲気、光景です。

観客の体験や会場の雰囲気は、観客自身によるSNS、またメディアやテレビ放送を通じて世界中に発信されることとなります。

また、これは東京2020大会のイメージが発信されるということでもありまして、大会成功の大きな要因となります。そのような意味からも、スポーツ・プレゼンテーションが果たす役割はとても重要なものとなります。

今後、スポーツ・プレゼンテーションのコンセプト、また、実施内容を検討していくに当たりまして、本日はアスリートの皆様に御意見を頂戴したいと思っております。

選手として経験され、よい印象が残っているようなスポーツ・プレゼンテーション、また、逆にあまりよくなかったもの、スポーツ・プレゼンテーションに取り込むべく要素やアイデア、また、アスリートとしてスポーツ・プレゼンテーションに期待するものなど、皆様からいろいろ御意見をいただきまして、ぜひ、今後の検討の参考にさせていただけれ

ばと思います。

よろしく願いいたします。

○高橋委員長

御説明、どうもありがとうございました。

それでは、このスポーツ・プレゼンテーションについて、アスリートの皆さんから御意見を頂戴いたしたいと思いますが、質問、意見のある方は、ぜひ挙手の上、発表をお願いいたします。

では、池田さん、お願いいたします。

○池田委員

池田です。

スポーツ・プレゼンテーションは、僕がロンドンオリンピックに出場したときに、一番初めのバドミントン競技の1試合目だったんですけれども、非常にスポーツ・プレゼンテーションがすばらし過ぎて、めちゃめちゃ緊張したということなんです。

でも、本当にずっと、ロンドン、北京、2大会出場して、あの入場するときの雰囲気というのは今でも頭に残っているぐらい、最初はすばらしかったなという、すごい印象です。

どういうところがよかったかという、もちろん観客が非常にスポーツを応援する文化というのに長けているのかなというのを感じたのと、ちょうどカウントダウンからスタートしたんですね。

選手が入場する前に10、9、8と、ありがちなんですけれども、それをしっかり観客と一緒に盛り上げていっている姿を見て、こういう場所で試合をするのは本当に光栄だなというふうに同時に感じたのが、非常に記憶に残っております。

なので、何が言いたいかという、こういうふうな演出も含めて、もちろん凝ったものをつくるというのは非常に大切なんですけれども、そういった観客がどういうふうに応援したらいいのかとか、どういうふうに盛り上がったらいいのかというのもちろんと周知していくことが非常に大切なんじゃないかなというふうに感じていて、スポーツ全般だと思うんですけれども、なかなか日本人というのは大きな声を出して応援する文化というよりは、しっかり自分のファンとか、あと、自分なりに応援していくというところがどちらかという強いのかなというふうに感じているので、どういうふうに観客を巻き込んでいくのかというところが非常にポイントになってくるんじゃないかなというふうには感じています。

○高橋委員長

ありがとうございました。

河合さん、お願いいたします。

○河合副委員長

水泳のことでしかあれですけれども、イメージとしては、始まる前に、特にパラの場合は競技のルールとかが複雑なので、簡単な、本当に二、三分の動画で、ルール説明とか、クラス分けの説明というのが、大体、ここ何大会では、リオとかロンドン等では流れていたなというふうに思っていますし、始まる二、三十分ぐらい前から、マスコットがプールサイドを走り回るみたいなのがあって、盛り上げるみたいなのはよくやっていたなと思います。

今、池田さんが言ったみたいに、カウントダウンして、ファイナルセッションというのは、決勝の午後のセッションが始まるよとか、朝のセッションが始まるよみたいなことを盛り上げているとか、あとはDJとか、アナウンサーのような方がいて、そういう盛り上げとかをやっていた。

その中に、割と最近の傾向としては、DJとかアナウンサーの方々も、障害のある方々がパラの場合入っていたりすることで、より理解が進むというようなことも多く見られていたなというふうに思っています。

個人的に、レースに出るときに、イメージにすごく、僕が見えないからというのがあると思うんですけれども、入場するときの曲は相当インパクトありますね。

水泳のときに、決勝の前とかに流れている曲はすごく覚えていて、帰ってきてから調べて何枚もCDを買ったのをすごく覚えていますので、そういうのも含めて、格好いいのをぜひやってほしいなというのはすごく思うところです。

以上です、とりあえず。

○高橋委員長

ありがとうございます。

萩原さん、お願いします。

○萩原委員

池田委員と私がかぶるところがあるんですが、ただでさえアスリートというのは、オリンピックに出ることで緊張していると思うので、その緊張をいたずらにあおるようなことをあまりされてしまうのもどうかというところはありますね。

私は、入場行進でスポットライトなんか浴びせられると、本当に競技ができないぐらい、多分、緊張するんじゃないかなと思います。

ある意味、もちろん競技のおもしろさというのは、あおるのも必要なんですけども、楽しむのは競技そのものですので、オリンピックは多少シンプルでもいいのかなというふうに思ったりすることもあります。

今の意見とは対極になるかもしれないんですけども、日本の人というのは確かにスポーツを楽しむということに対して、例えば声を出すだとか、そういうことが不得手なところが確かにあると思うんですね。

私はバスケットですけども、日本でよくやるバスケットの大きな国際大会で、DJですとか、会場の雰囲気をあおるだけあおって、物すごく格好いい音楽をかけて、盛り上げるだけ盛り上げて、いざ競技が始まったらしーんとしちゃうみたいな、そういうことも起こったりするので、いろんな大会がありますけれども、逆に、オリンピックは多少シンプルでもいいのかなというふうに考えたりしたりします。

以上です。

○高橋委員長

ありがとうございます。

うなずいているアスリートの方もいらっしゃいますが、どうでしょうか。

では、及川さん、お願いします。

○及川委員

車椅子バスケットの及川です。

車椅子バスケットボールは人気があるスポーツと言われているんですけども、僕は、シドニー、北京、ロンドン、リオと行って、大体、DJみたいなのが入って、スポーツエンターテイメント的になったのは本当にロンドンからなんですね。

それまでは、たくさんの方が集まるんですけども、シュートが入ったら、わーみたいな感じだけで、全然抑揚がないというか、ゲームの進展も何だかわからないみたいなところも確かにあって、子どもたちがわっと騒いでいるか、自国の応援が盛り上がってくるかぐらいだったんですけども、DJの人が入って、ロンドンから一気に、全体での空気感というのができ上がってきて、その人が本当にゲームのリーダーシップをとっていくというか、キャラクターも物すごく立っていて、選手の特徴もよく知っていて、それを説明しながら、「こいつがやってきた」みたいな感じになって、どんどんエンターテイメントしていくと

というのは、本当に、観客がいつも総立ちで盛り上がり、最後に向かっていくという演出も含めてすごくよかったかなと。

そういうことがロンドンからずっと続いているという感じで、最初は、観客、来た人たちは見方がわからない、何がどうなっているのかわからない、誰がよくて、誰がどうなんだというところも含めて、DJの人が教えてくれて、音楽とともに、こう乗っかっていくというのはすごくいいかなというふうに思います。

バスケットの場合は一つの会場なので、全体が一体感をつくるのはすごくやりやすいという意味でも盛り上がりはできるかなと。

一方、僕がリオでヘッドコーチをやっていたときには、周りがうるさくて、タイムアウトで何も聞こえないという。タイムアウトは、僕が選手たちに何かを伝えるためにタイムアウトをとっているのに、どなっても伝えられないぐらい観客が盛り上がり過ぎているところ、これは競技にかなり影響しているなということがありました。

あとは、盛り上げようとする気持ちがあまりにも大きくて、ゲームとは関係ない盛り上がりが起こってしまうという、シュートが外れているのにわーとなっていたりとか、そういうことも間違いなく今まであって、そういったところはうまく、今はDJの人がコントロールしてくれたりしているんですけども、ある意味、コントロールもありつつ、競技中の我々のスタンスからいくと、声が聞こえないというところに関しては何か対策があるといいなというふうには思いました。

○高橋委員長

及川さん、ありがとうございます。

○森会長

室伏さんみたいな一人で戦っているような人は、盛り上げた方がいいのか、静かな中でやりたいのか。よく自分でおる人がいるじゃない。

○高橋委員長

こうやって、はい。

○森会長

それと合わないじゃない。

○室伏局長

私は一人で淡々と投げる方かと思えますけれども、置かれた状況でいつでも投げなければいけない。

ただ、陸上は同時進行でいろんな競技をやっていますので。

○森会長

やっているときに、向こうで走っているしね。体操もそうだろう。

よく危なくないかなと思って、特にぐるぐる回っている、向こうの方で突然ぱっと拍手したりするでしょう、向こうの跳び箱をやっているときに。ああいうのはもう平気なのかね、なれてくると。

我々素人が見ていると、かわいそうに、ぶんぶん回っているときぐらい黙っていてやればいいのと思う。

そんなことを考えているようではだめなんだな。

○高橋委員長

それでは、田口さん、よろしくお願いします。

○田口委員

森会長のような方におっしゃっていただきたくて、私も射撃ですので、あおられると、一生懸命、気持ちを抑えようとしているところにカメラが近寄られたりすると、気にしないでおこうと思うのが結局気にしていることになりますので、いろいろと水泳とか、よく皆さん入ってきてガッツポーズして、格好よく入られるのを格好いいなと思うんですけども、こんなにカメラに寄られたり、寄っている姿とかを見るとつらいなと思ひまして、必要以上に至近距離にカメラが寄ってくるのではなくて、今の技術でしたら遠くからカメラが寄れるというのもあるので、もちろんそういうのを見て、お客様がテレビで見られている方が楽しむというのも必要かとは思っています。

ただ、そのあたりは選手のメンタルの部分も考えていただきたいかなというふうには思います。

あと、さっき及川さんがおっしゃっていた、多分、私もリオでハーフタイムにぎゃあぎゃあ応援していた方なんですけれども、ただ、本当に応援に行くのが楽しいなど、車椅子バスケットいいなと思ったので、射撃はしーんとしているので、そういう中で、見に来ている皆さんが、応援も大切ですし、その雰囲気も楽しまれているというのはすごくうらやましいなとは思いました。

ハーフタイムとか、選手がはけた後にマスコットが車椅子に乗ったり、あとバスケットをしたりですね、そういうのはすごく子どもたちも喜んで見ていましたし、あれは南米の方だったからかもしれないですけども、大人たちも喜んで楽しまれていたと思ひました。

こういうのが日本でも盛り上がると、きっと会場が楽しいという、何となく、皆さんがスポーツを見にいくと楽しいというのが残るんじゃないかなと思ったんですけども、ただ、心配なのは、南米の人たちは、多分、わっと勝手に自分が楽しくというのがあったんですけども、もし私が日本であれをされても、自分ができるかな、恥ずかしいなと思った。

でも、それをどうやれば皆が楽しく盛り上がって、立ったり、いろんなことができるというのが、解決策はないんですけども、何かそういう方法があればいいのかなというふうに思いました。

あとは、マナーでは、リオで私が見ていて、これはつらいだろうなと思ったのは、ゴールボールとブラインドサッカー、ボールに鈴が入って、その音を聞き分けて視覚障害者がボールをつかんだり、蹴ったりするんですけども、そういうときも、ブラジルの場合は、ゴールしたらずっと盛り上がっていますし、もう選手は試合が始まっているのに、キャッチしたら、わっとなっていて音が聞こえないというのがあったんですね。

そこで、ボランティアの人たちが、枝に紙がついたもので「Silent please」とか、「Be quiet」とか書いているんですけども、多分、そんなのは見えてないんですね。

ですので、ああいうのを、何かもうちょっとうまいこと出せる、一瞬、盛り上がるのはいいと思うんですよ、ゴールした途端。でも、すぐに静かになるというところをお教えするのもいいのかなと思いました。

バスケットとか、最近は画面とかにいろんなのがあらわれていると思うんですけども、この間、映画を見にいったら、カメラの頭をしている映画マン、何というのですかね、映画泥棒というのですか、何かやっていますよね、携帯は切ってとか。

ああいうがあると、聴覚障害者の人も、ただ会場で言われるだけだと聴覚障害者の人はわかりませんので、そういう絵で見てもわかるようなものを出していただくのも一つの手なのかなというふうに思いました。

以上です。

○高橋委員長

応援とか、盛り上がる誘導をするような形と、今度は集中するところの誘導をするところ、しっかりそこをきっちり分けていかなければいけないのかなと。

陸上だと、わーとなっても、スタートの前には電光掲示板で「しーっ」というような放送を流すだけで会場が一気に静かになってくれるといった形で、その抑揚等がちゃんと誘

導されている部分というのをつけていかないと、どっちかに寄り過ぎてはいけないのかなという感じは確かにいたしました。

また、さっき及川さんが言われたように、自国の応援だけで盛り上がるのではなくて、自国以外のところの競技があったところもちろんと応援が同じような感じでできるような形で、誘導する人というような立ち位置というのは確かにあった方がいいのかもしれないという感じがあります。

また、日本は、どうしても競技大会とか記録会というような大会が今まですごく多かったので、エンターテインメントとスポーツというのが重ならない部分の人たちもまだまだ世代的に多いと思うんですけれども、先ほど及川さんが言われたように、シドニーオリンピックのときのオリンピックの状態と、今のロンドン、リオといったときの会場は全く違うと思います。

非常に明るく、応援の人たちとその選手をつなぐといいますか、そういった雰囲気を一体化させるようなエンターテインメントみたいな形の大会になってきていると思うのですが、そういった意味では、試合で盛り上がって、次の試合まで非常にまたしーんとしてしまう、その間の盛り上げをずっと継続するために、マスコットであり、また例えば日本であれば太鼓がそこの中に入って、そのハーフタイムの間、日本の文化を伝えるような時間であったり、また、同じように舞踊などが入って、スポーツには関係なくても、日本のよさを伝えるような、そういった部分がコラボしてもおもしろいのかなというふうにも思います。

私は、最近の大会を見ているとすごく楽しいというのは、田口さんと同じように、私たちもスポーツのイメージを変えていくところを、これから東京に向けて変えなきゃいけないと思うんですけれども、いざ東京のときにそれをやるというのも、観客も私たちアスリートもいきなり過ぎてびっくりすることもあるので、そういったエンターテインメントを取り入れていくのであれば、これから来年、再来年の各NFが行う大会等でそういったものを少しずつ取り入れていくような形で、選手もなれて、会場の人たちも応援の仕方になれてというものを、少しずつ試し期間というものをつくっていくことがいいのかなというのを感じました。

それでは、また、こちらの方も、多分、ゆっくりと振り返って考えてみると、皆さん自身いろいろな意見があると思いますので、意見がございましたら、事務局に伝えていただければ、またそちらも参考にさせていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、これで用意をしてあった議題というのはもう全て終了したんですけれども、まだ時間がありますので、ここで池田委員から一つ御提案があるということを伺っております。

そちらの方を、ぜひ、池田委員からよろしくお願いします。

○池田委員

皆さん、すみません、たびたび池田でございます。

今回、せっかくこういう機会をいただいたので、一つ、私の方から御提案ということでさせていただきたいと思っております。

その背景としては、アスリート委員会が発足して、僕は途中から参加という形で、入れかわりということでもかかわらせていただいたんですけれども、もう少しアスリート委員の、先ほど、皆さんの手元に名簿があると思うんですけれども、こういった人材のリソースをうまくより活用して、目に残るような形で、アスリート委員ももっともっと大会のムーブメント、エンゲージメントにかかわっていければいいんじゃないかなというふうな思いを以前から抱いていました。

そういった中で、ワーキング1と2で、ムーブメント、エンゲージメント、もう一方は大会サービスレベルの向上ということで二つに分けて動いていっているんですけれども、そういった1と2関係なく、オリンピックのムーブメント、エンゲージメントに、どういうふうにアスリートがかかわっていけばいいのかなというところでいろいろ検討した中で、こういった、一つアイデアレベルなんですけれども、実現できないかなというので高橋委員長に少し御相談して、時間があれば提案してみましようかという話をいただいて、少し御時間をいただくことになりました。

今から映像を1本見ていただきたいんですけれども、事前に説明すると、この映像はLIP DUBというふうな映像で、中には知っている方もいらっしゃると思うんですけれども、プロモーション映像に近いものになっております。ちょっと映像の頭出しだけ。

僕も座って話すのは気持ち悪いので、立たせていただきます。

LIP DUBというところで、この映像は学校の宣伝というか、そういった形でLIP DUBというのが使われていて、私が何を話したいかという、こういったものを活用して、東京オリンピック2020、アスリート、そして組織委員会の皆さんも含めて、こういった映像をつくって、より多くの方にオリンピックを知っていただけないのかなというところで、大会ビジョンとして「多様性と調和」という言葉もありますので、参加するアスリート、メダ

ルを取ったOG、OB、オリンピックの皆さん、そして大会のサービスを支える方も含めて、それを大きく含めると東京オリンピック・パラリンピック2020だと思うので、そういった形をうまく表現できているものが、こういったものに近いんじゃないかなというところで、説明させていただきます。

では、お願いします。

(映像上映)

○池田委員

こういった形で、学校の生徒が前に出て、音楽も流れつつ、カメラが1台で、こういうふうな形で近くに寄っていくんですけども、扉を開けると、こういうふうな広告だとか、メッセージだとかが出てきて、みんなでこういうふうな形で、少し賑やかな形で始まるんですけども。

学校なので、何か優勝したトロフィーだとか、学校のクラブのTシャツだったり、いろいろなものがこういったところで表現できているのが非常におもしろいかなというところで、こういうふうなものをつくるときに、組織委員会のスタッフの皆さんを含め、せっかくこういうふうな、おもしろい法被だったり、団扇だったりがあるので、皆さんに持っていて、オリンピック・パラリンピックがこういうふうな形で盛り上がっているんだよ、現在、というところを少しずつ表現できると非常におもしろいんじゃないかなと思っているんです。

これから、いろいろと映像が進んでいく中で、いろんなスポーツの選手が出てきたり、いろんな部活、チアリーダーも中に出てきたり、映像を見ると、各学校が持っている部活動だったり、音楽だったり、人種だったり、そういったところがうまく表現できている、そういった映像になっています。

大体、全体で映像が5分弱ぐらいで終わって、音楽も3曲ぐらいで回すような感じですね。

この映像を僕が一番初めに知ったのは、軽井沢にISAKというインターナショナルスクールがあるんですけども、そこで生徒が1時間ぐらいで撮ったVTRを見させていただいたときに、ISAKというのは52カ国ぐらいから外国人が集まっている全寮制の学校で、日本でいうと高校生の年齢ですね。

だから、その人たちが1時間ぐらいでVTRを撮った映像があって、それを見たときに、いろんな人種がいたり、肌の色も違いますし、いろんな国旗がその映像に出てきたり、そういったことを見ていると、ACも含めて、アスリートも含めて、組織委員会スタッフも含め

て、こういったことができるということが、何か、今後、2020年以降の、目に見える、可視化されている一つのレガシーで残っていくんじゃないかなと、非常に価値のあるものんじゃないかなというふうには感じています。

これもYouTubeで投稿されていて、大体、「LIP DUB」と打つと上位三つぐらいに検索ワードが出てくるので、非常にこれがクオリティが高い方になりますね。

さっきのサーフィンのボードから、こういうふうなプールの映像に移って、この学生が飛び込んでいくんですけども、ここもうまく、GoProか何かの映像だと思うんですけども、水の中までしっかり映像が映り込むような形で、ボールを水球の選手が投げていて、こういうふうに投げると場所が変わってサッカーの方に移っていくという、そこまでテクニカルな技術じゃないと思うんですけども、こういった、例えば選手の活躍するような会場がボールを投げて移っていくのとか、室伏さんがハンマーを投げて、どこかの会場に移るだとか、いろんなアイデアを出せば、多分たくさんあると思うんですけども、こういうふうな形で、何かACも、なかなか来られないアスリートも中いる中で、こういうふうな映像を制作することで、今はこういう時代なのでSNSで広がるということもあると思うんですけども。

先ほど話した参画プログラムの中にもこういった要素というのは少し入っているとは思っています。なので、こういうふうな映像を見た子どもたちが、自分の学校で撮ってみるだとかということも幅が広がるので、単なる、先ほど村里さんからの話を聞いて、ACだけのものではなくて、大きな目で見ていただくと何かおもしろいものができるんじゃないかなというところを一つ感じたので、こういうふうな場所をいただきました。

なので、終わって、学生が全部、構成から何から何までしているので、こういう撮っているシーンも、映画でいうエンドロールみたいな形なんですけれども、やっていると今後、形に残っていくものではないかなというふうには感じています。

以上になります。

(上映終了)

○高橋委員長

池田さん、どうもありがとうございました。

非常にインパクトが強くて、楽しい映像だなという思いがありますけれども、今のこの池田さんのプレゼンテーションについて、何か、御意見や感想などあるでしょうか。

こういった形で、まずは先ほど池田さんが言ったように、アスリート委員の私たちがオ

オリンピックやパラリンピックに向けて心を一つにしていくという、その気持ちを固めるといったところにも、一つ、つながると思いますし、また、この中で表現していくことに、例えば先ほどのメダルプロジェクトの携帯電話を入れていくのを映像に入れるとか、マスコットをそこの中に出していくというような、今までのプロジェクトの周知をもっと広めていくためのものを盛り込んでいくことによって多くの人たちに認知していただける。

例えば、それ以外にも、考えればすごくおもしろいものは、全部の新しい競技も入った今の競技数全部を回していくことで、オリンピックはこれだけ、またパラリンピックはこれだけの人たち、競技があるんだよということを伝えていったり、また、そこから一つメッセージとして伝えることができ、もしムーブメントになれば、その後に各学校でそういったものを、オリンピック・パラリンピックをイメージして皆さんがちょっと形をつかったものを募集してみましようといったものが広がっていったり、また、これから各オリンピック・パラリンピックのキャンプを張るようなところがあると思うんですけれども、そういうところが、うちのところはこういった競技ができますよというアピールをするために、まちの人たちが自身のところをアピールする映像をつくったりというように、何かしらのきっかけになるのではないかなというような感じが、池田さんのお話を聞いて私自身は感じましたが、皆さん、まだまだ提案ということで、乗り越えなければいけない壁というものはあると思うんですけれども、これは一体どういうふうな形で、本当に実現に当たるのかというところを、これから少しちょっと事務局の皆さんにも訪ねていかなければいけないところだと思うんですよね。教えていただいてもいいですか。

○中村CFO

ありがとうございます。

こういったアイデアをいろんな委員会でもいただいています、ほかの委員会でも、ちょうどいろんな全国の高校生とか学生が地元のPRのビデオをつくってもらって、それを例えば会場の自治体の大会のときに、競技の合間に流すとかというアイデアがあって、なかなかその映像を公募したりするのはいいんじゃないかというような意見が出ていました。

今のも多分、池田委員のも同じコンセプトだと思うので、例えば各種目の紹介ビデオみたいなものを高校生につくってもらってどんどん投稿していただいて、もしすごいものができれば、各競技会場で競技の合間にそれを映すとか、そうすると、多分、学生のモチベーションもすごく上がると思うので、いろいろと考えていきたいと思います。ありがとうございます。

○高橋委員長

ぜひ、もしやるとしたら、多分ここにいらっしゃる皆さん方が登場することになると思うんですけども、自分が登場するというふうになったときに、皆さんは「いいよ、やっ
てあげるよ」というような気持ちでいらっしゃるかどうかというのはどうでしょうか。

○萩原委員

いわゆる私たちのモチベーションビデオなんかをつくったりしますけれども、競技の前に、音楽に乗せてアスリートがプレイしているのを見たり、そういうようなものだと思うんですけども、そこで結構問題になるのは、曲の使用が、著作権とかが結構難しかったりして、私たちも外に出せなかったりするときがあるので、そのあたりは難しいのかなと思ったりも、もちろんしますね。

○高橋委員長

そうですね。そのあたりは、先日お話をしたときに、組織委員会の方々の中で音楽に携わっている人がいるから、私が音楽をつくるよというような意見もいただいたりもしたり、また、振りつけなんかも、池田委員から、誰かに頼むのではなくて、例えばフィギュアスケートの踊りを扱っている人が、選手が振りつけを考えながら、構成も考えて、手づくり感でつくっていけばいいのかなというような話はいたしました。

○森会長

撮っちゃいけないというんじゃないんで、著作権があるから著作権料を払えばいい。JASRACがあれを持っているわけで。

だから、みんながカラオケで簡単に歌っているけれども、あれも全部、著作権料を取られているんですよ。あの機械にひっかかれていますからね。宴会で歌っても本当は払わなきゃいけないんですよ。

だけど、歌っちゃいけないといたら、おもしろくないんじゃないですか。大いに歌えばいいんです。払うものを払えばいい。

○高橋委員長

そうですね。そういった意味では、多分、音楽だけではなく、ビデオをどういうふう
どこから借りてきて、どういうような形でというのは、どうしても、ただでできるものではないので、そういったものをどういうふう捻出していくかということも含めて、これから事務局の皆さん等々、本当に実現できるかどうかというのを、皆さん方にもこれから御協力をお願いしていきたいというふうに思っていますが、よろしく願いいたします。

大丈夫でしょうか。

○森会長

一番うるさいのがIOCだよな、逆に。それはオリンピックのあれに触れるからだめだとか、スポンサーに触れるからだめだとか、むしろIOCが一番厄介ですね。

それを調整するのが君らの仕事だから、そう御心配ないように。IPCもそうだよ。

○高橋委員長

田口さんも御意見があるということで、お願いします。

○田口委員

私も、この間も見せていただいたんですけども、何となく一体感ができるかなと思いました。アスリート委員も組織委員会の皆様も、結構、皆様、縦割りとは言わないですけども、それぞれのプロフェッショナルでされているので、横のつながりが、こういうのをすることによってすごくできるのかなと思いました。

以前、私がエンブレム委員をさせていただいたときに、毎回のものをずっとおさめていただいて、それを一つのムービーにして最後見せていただいたんですけども、そういうのを見ると、自分らもやってきた歴史じゃないですけども、達成感もありますし、これが終わった後、見るのもすごくいいかなと。招致のときもそうでしたよね。招致活動をいろいろ行ってきたのを一つにまとめてやったりしました。

そういうのを、一旦、公に出して、それをまねて、皆さんから、高校生の方とかから募集するのもまた一つの手なのかな、それで参画していただくというのがいいのかなというふうに思いました。

○高橋委員長

ありがとうございます。

では、齋藤委員、よろしく願いいたします。

○齋藤委員

せっかく、もしつくるのであれば、フォーチュンクッキーとか、恋ダンスみたいに、皆がまねしたくなるようなものにすれば、例えば私たちがつくったものをアップするのが楽しみになるみたいなものにすれば、どんどん機運というのも高まるところにつながるんじゃないかなと思いましたので、そういう点が入っていくのもおもしろいんじゃないかなというふうに思いました。

あとは、先ほど森会長が言われていたような新東京五輪音頭を使ってというところもあ

るんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

○森会長

そういうことが大好きなのが中村さんですから。

○高橋委員長

では、中村さん、どうぞよろしく願いいたします。

たくさんのお意見どうもありがとうございました。

以上で予定をしておりました議事が全て終了いたしました。

それでは、本日の会議の締めくくりにあたりまして、森会長から一言、ぜひ、よろしく
お願いいたします。

○森会長

さっきからお話を、質問を、指名も受けないのにしゃべってばかりおまして、ありがとう。

大変お暑い中で、とてもいい御体験、PTAのお世話までされて御苦労さまでございます。
町内会の方もおられるんじゃないかと思いますが、ますますこれからだんだん高まってい
くと思います。

あれは、まだ日が決まりませんが、新しい曲が発表される時、これは事務総長も当然
考えておられますけれども、そのときには皆さんにも案内するから、皆さんもその法被を
着て、その歌の発表のときに景気づけに来てくれませんか、時間があったら。御案内しま
すから。その方が、大勢来られた方がいいと思います。

ぜひ、よろしく願いいたします。ありがとうございます。

○高橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは、最後に、事務局から事務連絡をよろしく願いいたします。

○事務局

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

3点ございまして、1点目は、開閉会式に関する御意見を賜りまして本当にありがとうございました。
いただきました御意見は、開閉会式のコンセプトの策定の参考にさせていただきます。

2点目は、本日の御意見につきましては、会議では時間が限られておりましたので、そ

それぞれの議題につきまして、また御意見がありましたら、事務局の方にお寄せいただければと思います。

3点目は、本日お配りしています資料と議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページに公開いたしますので、よろしくお願いいたします。

次回の開催につきましては、また、別途、御連絡を申し上げます。

本日は記者の皆様到最后まで傍聴いただきましたので、プレスへのブリーフィングはございません。

事務連絡は以上でございます。

○高橋委員長

どうもありがとうございました。

それでは、第8回アスリート委員会はこれにて終了させていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。